

学部留学生の学習活動の現状と意識
—九州大学の場合—

九州大学留学生センター 因 京子

1. はじめに

本稿では、学部に入学者の外国人留学生の学習場面における日本語使用の現状とそれについての留学生自身の意識に関して九州大学の1、2年生を対象に行なった調査の結果を報告し、それに基づいて学部での学習に求められる能力と入学後の日本語教育について若干の考察を行なう。この調査を行なうにあたっての基本的関心は、学部入学を希望する外国人に対してどのような日本語試験を課し、入学後はどのような日本語教育を提供すべきかについての指針を得たいということである。そのためには、留学生自身を対象とした調査だけでなく指導に当たっている教官を対象とした調査、及び、卒業時及び卒業後の進路についての調査を行なう必要がある。今回の調査は、そうした調査と補完的に考えるべきものである。

九州大学の学部留学生の入学時・入学後の状況を以下に大まかに述べる。まず、日本語に関する入学試験は、これまでは日本語能力試験1級と九州大学の日本語試験「読解・作文(100点)」が課されてきたが、平成15年には二つの点で変更があった。一つは日本留学試験が利用されるようになったことである。もう一つは大学の課す試験が「読解・記述(100点)」と「聴解(30点)」という構成となったことである。「読解・記述」はこれまでの「読解・作文」とほぼ同じくある程度の長さを持つ課題文についての設問に解答するもので、解答形式は記述が主である。「聴解」は、講義のような6、7分程度の課題について設問に答える。各試験の結果の利用方法と可否の判定は、これまでと同様に、各学部に任されている。平成15年の大学の日本語試験の利用状況は以下のものであった。

表1 各学部の入学試験(「日本語」関連)

日本留学試験のみ	理・医(医学科)
日本留学試験と「読解・記述」	経済・工
日本留学試験と「読解・記述」「聴解」	文・法・教育・薬・歯・医(保健学科)

入学後は、全学教育科目と専攻教育科目中の低年次専攻教育科目を履修し(表2「授業科目の区分一覧」参照)、学部や学科によって違いがあるが、多くの場合2年次の前期または後期が終了した段階で進級の判定がなされる。低年時に履修すべき科目の種類や数も学科によって異なる。履修細目の例として、平成13年度と14年度の入学者数が最も多かった工学部電気情報工学科の場合を示す(表3参照)。この科の卒業要件は131単位で、2年次終了までに全学教育科目を、科目区分に沿って42単位総合選択履修方式で6単位合計48単位履修しておかなければならない。工学系、及び多くの他の理系学部の学科はこれに近い形である。文系では総合選択履修方式による単位数が理系より多いが、2年次までに取得すべき総単位数は理系の場合とあまり変わらない。

留学生に対する科目としては、外国語としての「日本語」(年間11コマ)が提供されており、第1外国語または第2外国語として履修できる。但し、医学部と歯学部は第2外国語としての履修しか認められていない。「日本事情」(年間4コマ)は個別教養科目に含まれ日本人学生も履修できるが、留学生の場合2科目4単位までが単位として認定され、その内の2単位分だけはコア教養科目の単位とすることができる。以上の点を除けば受講と進級についての条件は日本人学生と全く同じである。

表2「授業科目の区分一覧」

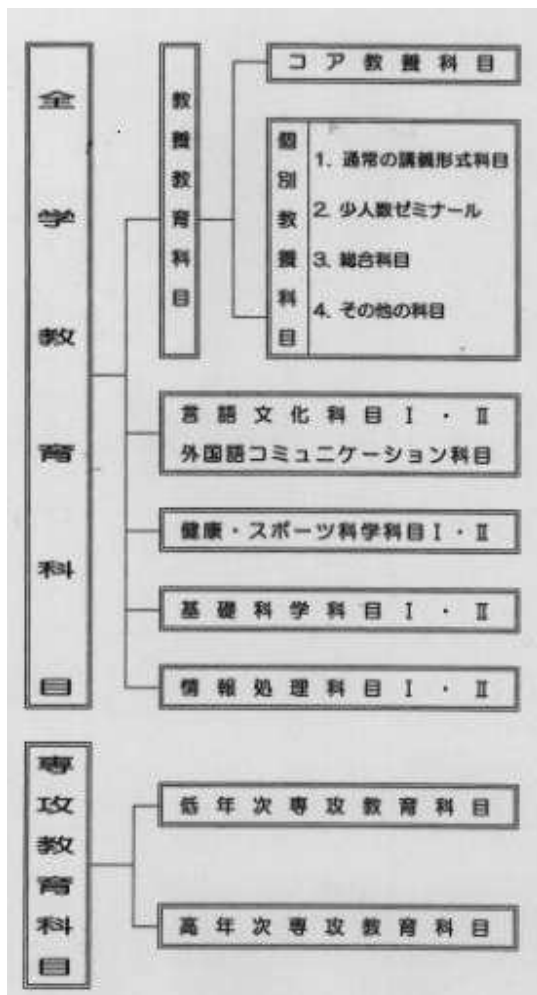


表3 「工学部電気情報工学科 履修細目」

区 分		授 業 科 目	最低修得単位数			受 講 キャンパス	
			科目区分毎の 単 位 数	総合選択 履修方式	合 計		
全 学 科 目	教 養 科 目	人間と文化(2) 文芸と人間(2) 歴史の認識(2) 異文化の理解(2) 現代の政治と法(2) 現代の社会と経済(2) 地球と生命(2) 数値と情報(2) 物質の世界(2) 上記で修得しなかったコア教養科目	2単位 2単位	10単位	131単位	六本松	
		医療と福祉(2) ※1	2単位				
		六本松キャンパスで開講する科目	4単位				
		箱崎、病院キャンパスで開講する科目					
専 攻 科 目	教 育 科 目	言語文化科目Ⅰ	第1外国語 第2外国語	6単位 4単位	10単位 ※2	131単位	六本松
		健康・スポーツ科学科目Ⅰ	健康・スポーツ科学講義(2) 健康・スポーツ科学実習(1)	2単位 1単位			
	基 礎 科 学 科 目	基礎科学科目Ⅰ	【必修科目】 線形代数A(1.5)、線形代数B(1.5)、 微分積分A(1.5)、微分積分B(1.5)、 微分積分統論(2)、数学基礎演習Ⅰ(1)、 数学基礎演習Ⅱ(1)、数学基礎演習Ⅲ(1)、 力学基礎・同演習Ⅰ(1.5)、 力学基礎・同演習Ⅱ(1.5)、熱と波動論基礎(2)、 物理学基礎実験(2)	18単位			
			※3 基礎化学結合論(2)、基礎化学熱力学(2)、 現代物理学入門(2)				
		情報処理科目Ⅰ	情報処理基礎演習(1)	1単位			
		言語文化科目Ⅱ					
		健康・スポーツ科学科目Ⅱ					
		基礎科学科目Ⅱ	※3 数理統計学概論(2)				
		情報処理科目Ⅱ					
		外国語コミュニケーション科目					
専 攻 教 育 科 目	他専攻の専攻教育科目	低年次	入門 科目	79単位			箱 崎
		(第1学期)	電気情報工学入門演習、電気情報数学、 回路理論Ⅰ、プログラミング論Ⅰ				
		(第2学期)	電磁気学Ⅰ、回路理論Ⅱ、論理回路、 プログラミング演習Ⅰ				
		第4学期以降	工学部専攻教育科目履修の手引きを参照すること。				

※1 「医療と福祉」は、コア教養科目のうちの不足する区分の単位とすることができる。
 ※2 総合選択履修方式の10単位には、科目区分毎の最低修得単位数分として履修した科目を除いて履修すること。
 総合選択履修方式において、3年次以降に4単位以上履修することが望ましい。
 ※3 総合選択履修方式として、次の科目の中から2科目4単位を履修することが望ましい。
 基礎化学結合論(2)、基礎化学熱力学(2)、現代物理学入門(2)、数理統計学概論(2)

2. 調査の概要

(1) 調査方法

調査時期は平成14年度11月～平成15年1月である。後期授業は未だ終了していなかったが、試験期間及びその後になると回答者に協力を得ることも接触自体も難しくなると考えてこの時期に行なった。

平成13年度入学者26名と平成14年度入学者31名、即ち、調査の段階で1年生と2年生に在籍している外国人留学生（表4）で接触が可能だった者にA4 3枚（3頁）の質問紙を手渡し、1年生22名、2年生8名から回答を得ることができた。質問は日本語によったが回答の記述部分は日本語・英語・中国語・韓国語のいずれでもよいことにした。2年生からの回答数が少ないのは、2年の後期には殆どの学生が既に全学教育科目の受講を終了して専門教育の行なわれるキャンパスに移動しており、そのキャンパスが距離的に遠いだけでなく分散しているため、2年生への接触が非常に難しかったためである。

表4 1、2年生在籍留学生の内訳

	1年生（平成14年度入学）	2年生（平成13年度入学）
文学部	4（中国2、韓国2）	1（中国）
教育学部	1（韓国）	3（中国2・韓国）
法学部	1（中国）	2（中国・韓国）
経済学部	3（中・ルーマニア・カンボジア）	1（中国）
工学部	17（中6・韓5・マ4・シ・イ）	17（中7・韓5・マ4・シ）
農学部	2（中国）	2（中国）
理学部	2（中国）	なし
医学部	1（韓国）	なし
薬学部	なし	なし
	31（漢字圏23・非漢字圏8）	26（漢字圏21・非漢字圏5）

マ：マレー

シア シ：シンガポール イ：インドネシア

回答者は、1年生22名、2年生8名の計30名、国籍では中国15名、韓国7名、マレーシア5名、インドネシア・シンガポール・カンボジアが各1名となっている。専攻では、工学部18名、農学部3名、教育学部4名、経済学部2名、理学部・文学部・医学部が各1名である（表5参照）。

表5 アンケート回答者

学年・学部	学科	出身	回答時での滞日期間
1・1	・工 ・電気情報	・中国	・14ヵ月
2・1	・工 ・電気情報	・中国	・14ヵ月
3・1	・工 ・電気情報	・中国	・22ヵ月
4・1	・工 ・電気情報	・中国	・14ヵ月
5・1	・工 ・電気情報	・韓国	・14ヵ月
6・1	・工 ・電気情報	・マレーシア	・8ヵ月
7・1	・工 ・電気情報	・マレーシア	・8ヵ月
8・1	・工 ・電気情報	・インドネシア	・24ヵ月
9・1	・工 ・電気情報	・シンガポール	・20ヵ月
10・1	・工 ・物質科学	・中国	・21ヵ月
11・1	・工 ・機械航空工学	・韓国	・14ヵ月
12・1	・工 ・機械航空工学	・韓国	・14ヵ月
13・1	・工 ・物質科学工学	・マレーシア	・8ヵ月
14・1	・工 ・物質科学工学	・マレーシア	・無回答
15・1	・理 ・化学	・中国	・34ヵ月
16・1	・農 ・未定	・中国	・26ヵ月
17・1	・農 ・未定	・中国	・14ヵ月
18・1	・医 ・医学科	・韓国	・8ヵ月
19・1	・経済 ・経済工学	・中国	・20ヵ月
20・1	・経済 ・経済学	・カンボジア	・20ヵ月
21・1	・文 ・未定	・中国	・7ヵ月
22・1	・教 ・未定	・韓国	・60ヵ月
.....			
23・2	・工 ・電気情報	・中国	・29ヵ月
24・2	・工 ・電気情報	・中国	・35ヵ月
25・2	・工 ・電気情報	・韓国	・26ヵ月
26・2	・工 ・電気情報	・マレーシア	・22ヵ月
27・2	・農 ・農学	・中国	・36ヵ月
28・2	・教 ・教育	・韓国	・22ヵ月
29・2	・教 ・教育	・中国	・39ヵ月
30・2	・教 ・教育	・中国	・44ヵ月

(2) 調査項目

学習活動を「授業への参加」「期末試験の受験」「レポート提出」の3種に分けて量と学習者自身の困難の認識を尋ねた。困難の認識については、日本語など専ら留学生を対象としている科目は除外して、日本人に伍して受講している科目について回答するように求めた。具体的

には以下のような項目について質問した。

「授業」	1. 2002 年前期と後期の受講授業数	..	
	2. 学習者自身の困難の認識	..	
	a. 受講時の負担が大きい科目、困難の例	..	
	b. 前後の読解作業の負担が大きい科目、困難の例	..	
	c. 「聴講」「読解」以外の負担がある科目、困難の例	..	
	3. 困難への対処方法、授業担当者への要望	..	
「試験」	4. 2002 年前期と後期に受験した期末試験の数	..	
	5. 困難の認識	..	.
	a. 答案を書く上での困難の例	..	.
	b. その他の困難の例	..	
「レポート」	6. 2002 年前期と後期に受験した期末試験の数（覚えている「主題」）	..	
	7. 困難の認識	..	.
	a. 執筆の困難な課題、困難の例	..	
	b. 困難への対処方法、要望	..	
「日本語の学習」	8. 学前に不足していたと思う学習	..	
	9. 能力向上に最も寄与する／したと思う活動	..	
	10. 日本語授業への要望（内容、場所、時間、形式）	..	

(3) 学部留学生の学習活動の現状と意識

学習活動の量

① 授業受講数

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20-
 1週を受講数(コマ) ..											
1学期・				2	2	1	5	2	3	2	2	2
2学期・			1	2	2	4	2	3	3	2	3	
3学期・	1	3	2	1				1				
4学期・	1	1	2			2		1				1 (人)

1学期目には最少12コマ最高22コマ受講している。かなり幅があるが15~17コマを受講している者が最も多い。参考のために、留学生が最も多い工学部電気情報学科の1年生に在籍するある留学生の後期(2学期目)の時間割を示す。週に17コマ受講しており、専攻科目4、基礎科学科目6、言語文化科目3、教養教育科目3、健康科目1という内訳になっている。毎

日の予習・復習の負担はかなり大きいと想像される。

1年生後期の時間割（工学部電気情報学科の留学生）

月	火	水	木	金
1 線形代数	論理回路	基礎化学結合論力		現代政治と法日
2 熱と波動論	電気回路	学基礎・演習	日本語	本事情
3	電磁気学	英米言語文化演習	数学基礎演習	英語演習
4	プログラミング論	水の化学	身体運動実習	微分積分

②試験の数

試験の数（本）

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	・	22
1 学期	2		2	3	1	3	3	1		2	2		1		1		
3 学期	1	1						1	3	1							1

③レポートの数

本

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	・	30
1 学期	2	4	6	3	1	1	1	2		2							1
3 学期					1		1					1			1		(人)

1年生は一般にかなり多くの科目を受講している。1学期に15コマ受講であれば月曜から金曜日まで毎日3コマ、それ以上であれば4コマ出席する日もあるということである。進級までに取得すべき単位を各学期ほぼ均等に取得していくのであれば、数字の上では1学期に10コマ程度でよさそうに思えるが、必修科目の多い理系の学科では少なめでも15コマ程度受講しなければならないようである。

試験とレポートの数は人によってかなり差があるが、入学した直後の学期からかなりの数の試験を受け、レポートも書いていることがわかる。レポートの数が15本、30本と非常に多数なのは、コースの間に複数のレポート提出が求められる科目を受講した者である。実験科目では授業毎にレポートを提出しなければならないことが多い。

(2) 学習者の認識する困難

①授業に関して

講義形式の授業が多いためか、発表に伴う困難よりも、理解にともなう困難が数多く報告された。「日本人の話す英語」の理解、「英文和訳」など、英語に関連する訴えがかなりある。下に主なものをあげた。同様の訴えは、一つにまとめてある。

- ・ コア教養科目が難しい。興味が持てない。
- ・ 専門科目の内容が難しい。
- ・ 教官の話し方

早く、切れ目がない。

要点や話の節目がつかめない（フレーズの結びが複雑、言い直しが多い、など）

- 方言（関西弁）が理解できない。（九州弁、博多弁についての指摘はない）
- ・ 一般知識
 - 専門用語、固有名詞、外来語、先生の発音する英単語の聞き取りが難しい。
 - 有名人、有名事件などの象徴する意味がわからない。
- ・ 専門知識
 - 理論そのもの、内容そのものが難しく理解に手間取る。
 - 前提とされている基礎知識が不足している（日本人も）
- ・ 文字
 - 板書が読めない。（崩し字がある、どこに書かれたかわからない）
- ・ 英文和訳
- ・ 日本語のproduction
 - 日本語で発表を行なうための準備に手間がかかる。
 - 毎回の授業の最後に質問やコメントを書くことが求められたが時間が足りない。

②試験に関して

前期試験が終わってからしばらく時間が経過していたためか、要求水準の影響か、授業に比べれば困難の指摘が少なく「特になし」という回答が多かったが、以下のようなことがあげられた。

- ・ 長い文章を構成するのが難しい。
- ・ 幼稚な表現だということはわかっているが、洗練した言い方がわからなかった。
- ・ 漢字や表現を思い出せない。
- ・ カタカナの人物名を覚えるのが難しい。
- ・ 英語を日本語に訳するのが難しい。

③レポートに関して

レポートは、教養科目の期末レポートと理系の実験報告や問題解析などではかなり事情が違ふと考えられる。執筆すべき内容を調査する技能や専門的文章の構成と表現のための知識・技能に関する困難を指摘した者が多い。これらは日本語母語話者の学生にも共通する問題だと思われるが、外国人留学生の場合はそこに理解の程度と速度の問題が加わっているため、一層大きな困難を感じていることが窺われる。

- ・ 調べる量が多くて時間が足りない。
- ・ 内容自体が難しく、理解するのが難しい。
- ・ 漢字や表現が難しく理解に時間がかかる。
- ・ 思っていることを十分に表せない。
- ・ 表現が幼稚になる。
- ・ 経過は書けるが考察が書けない。

(3) 学習者の困難対処法

①学習活動

授業の理解かレポート作成かに関わらず、学習活動上の困難に対処するにはまず「人」に頼る者が最も多い。以下のような方法が挙げられた。

- ・ 友人（チューターを含む）に訊く。
- ・ 先生に尋ねる。
- ・ 教科書や参考書を何度も読む。

- ・インターネットで調べる。
- ・やさしい入門書などを参考にする。

②日本語の向上

「役に立ったこと」も「今後すべきだと思っていること」も、「友人と話す」「テレビを見る」が圧倒的に多い。「本を読む」をあげたのは、一人である。

③授業への要望

専門科目や教養科目のためには、次の3つを多くの学生が要望している。

- ・適当な入門書を指示してほしい。
- ・毎回の授業の概要がほしい。
- ・板書をわかりやすくしてほしい（書く位置、字の大きさ、字体）

日本語に関連する要望や希望としては、学習活動に関連したものが最も多いが、「福岡方言」や「お笑い芸人の話」がわかるようになりたいなど、より濃密な人間関係を培いたいという強い欲求が窺われるものもあった。大学院生とはかなり異なる傾向である。

学習方法についての要望としては、「書くべきレポートの見本を示してほしい」「自分の書いたレポートを添削してほしい」など、一般論的な提示やシミュレーションでなく現実的な課題に密着した具体性の高い学習活動を求める者が多い。

- ・レポートの書き方（枠組み、文体など）
- ・洗練された表現、文法的整合性のある表現
- ・福岡方言、お笑い芸人の話、日本の伝統的な表現

4. 日本語試験の方向性

ここでは、「入試の内容と方法」と「入学後の日本語教育」に関して指針を得るという観点から前節の内容を整理してみたい。留学生の回答からは、入学直後から多くの講義を受講しなければならない状況の中で多岐に亘って問題が存在することがわかる。最も基本的な学習活動である「授業（講義・演習）への参加」に困難が生ずる要因は、大まかに次の5つに類別できるだろう。

- a. 言語知識の不足
- b. 言語運用技能の不足
- c. 一般（社会）知識の不足
- d. 学習・研究技能の未熟
- e. 専門基礎知識の不足

この中には留学生に特有なわけではなく日本語母語話者の学生にも共通すると思われる問題も多く、留学生だけにしか起らない問題の方がむしろ少ないかもしれない。最近「日本人学生に日本語教育をする必要がある」とか「大学が高校や予備校の講師に基礎科目の補習を依頼した」などと報道されることがあるが、これらはd. とe. の問題に言及したものだと言える。しかし一方、問題の重大さ（深刻さ）の程度が留学生と日本人では大きく差があり、そうした意味では留学生に特有だと考えてもよい問題もある。a. -c. に類するものは、概ねそうであろう。

どんなに優秀な留学生であっても、外国語として学んできたのである以上、日本語について全く困難がなくなるということは考えにくい。我々がまず見極めるべきは、ある程度困難があるとしても何とか授業に参加していくためにどのような知識や技能を持っていることが必要な

のかということである。新しい留学試験の日本語が「日本語知識」そのものにかかる比重を軽減する方向であるならば、知識の不足を補完して学習活動を円滑に行なう技能を持っている必要がある。前節にあげたような困難に対処するには、少なくとも次にあげる二つは必須であると考えられる。

①未知の項目への対処技能

「未知の項目の出現」による困難は回答の中にも数多く訴えがあったが、わからない単語や表現が出てくるといった言語的な問題と、自分が全く知らないことが話の前提となっているという文化または基礎教育に関連する問題とがある。いずれの問題であるにせよ、未知の事項が出てきた時にそこで思考停止状態にならずに何とかする技能は何にもまして重要であると考えられる。

例えば、「特殊な専門語」「外来語」「日本式発音の英語」などを含め、未知であろうと考えられる語彙や表現を敢えて使用し、その処理が適切に行なえるかどうかを見るようなことを考えてもいいのではないか。文脈に存在する要素を利用してその場で処理を行なう、語形の概略をメモしておいて語形を推測し後で処理を行なうなど、音節の認識力や推測力、ストラテジー使用能力等の語彙知識以外の技能を用いる課題が考えられるべきであろう。

②複線的行動を行なう技能

回答の中に、「教官が板書してもそれがわからない、役に立てられない」という訴えが数件あった。ある留学生によると、「先生の話を中心して聞いていると先生の書いていることばを読むことができない。後になると何がどこに書いてあるのかわからない」というのである。日本人母語話者であれば、キー・ワードなどが板書されることが理解を助けることになっているのであろうが、留学生はそこに目を向ける余裕さえなく、板書が負担になっているらしい。かなり集中して聞かなければ聞き取れないというのは外国人の場合は当然起ることであろうが、聞いている内容に関連した板書を目で追えないような聞き方というのは、注意の向け方に聊か問題があるのではないかと感じられる。内容に関連したものであれば複数の情報源を同時に処理していくことができなければなるまい。

また、情報源が一つ（例えば「音声」）であったとしても、「音が取れる」「表面的な意味が掴める」ということにとどまらず、聞き取った内容にある解釈や位置付けを与えたり、他の知識と関連づけたりしながら聞く、次の段階の準備をしながら聞くなど、情報を解析しながら知識体系の中に位置付けていく作業が講義や演習に参加する上では必須である

新しい留学生試験の「聴読解」では、視覚情報と聴覚情報の二つの情報を同時に処理することが求められるわけであるが、視覚情報を選択肢を示すための単なる手段にするような課題でなく、授業の実際になるべく近い形の課題を考案すべきであろう。

5. 今後の課題

今回は1年生を中心に留学生本人を対象にした調査に止まった。問題を把握するためには、留学生本人以外からのデータが必要である。今後、一般教養科目と専門科目の教官に対し、留学生への指導上の問題点と成績評価の基準について調査を行なう予定である。学部や学科についてかなり状況が違うということも看過できない。前掲の表5に示したように、「工学部電気情報科」にはかなり多数の留学生が在籍しているので、この学科に絞って卒業後の大学院進学までを視野に入れて観察を行いたい。

同時に、狭義の語彙知識を補完する技能として本稿では「未知項目の処理」と「複線的行動」とをあげたが、これは妥当か、他にはどのような技能が必要か、そのような一般認知能力や学習能力を発揮させる日本語試験問題とは具体的にどんなものなのか、また、一般知識や専門基

礎知識をどこでどのように与えるのか、研究・学習技能をどこでどのように訓練するのかなどの問いに答えることも今後の課題である。